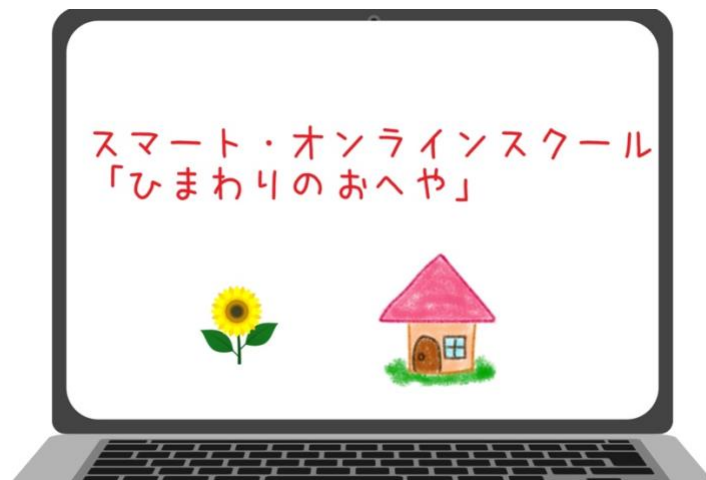


事業ストーリー



こんにちは。株式会社学びの庭ひまわり代表取締役 鈴木 敬です。

ここでは、私たちがなぜ、この事業をやりたいのかについて、お話しさせていただきます。

<なぜ、教育のオンライン化が遅れているのでしょうか？>

依然として収束に至らないコロナ感染の中、ようやく重い腰をあげてオンライン授業に踏み切った学校が増えてきました。

ただ、さまざまな業界でオンライン化が進む中、なぜ教育のオンライン化は、なかなか進まないのでしょうか？

「機械が使いこなせないから」一般にはそう考えられています。しかし、私たちは違う考えを持っています。

「オンラインの”タノシサ”がわからないから」

が、理由だと考えているのです。

<「オンライン=楽しい！」をインプットする必要性>

申し遅れました。

私たち「株式会社学びの庭ひまわり」は国内外に 38 教室を有する、オンライン音楽教育のプロ集団です。

「音は楽しい=音楽、オンラインは楽しい=オン楽」

をモットーに日々活動しております。

そんな私たちは、オンラインの使い方より「心理面」に注目しました。

「オンライン化が進まないのは、機械が使えないからではない。”オンライン=つまらない”と感じているからだ」

そう、考えたのです。

そこで、音楽ゲームやおしゃべりタイムなど、オンラインの「楽しさ」に特化した数々の

試みをピアノレッスンに取り入れ、2年が過ぎようとしています。

加えて、先生が一方的に教えずに、生徒さん同士でアイデアを出し合って問題を解く「アクティブラーニング」を取り入れました。複数の教室をオンラインで結び、遠く離れた生徒さんが一緒にレッスンするのです。

★別々の教室の生徒さんが問題を出し合う「クイズコーナー」



「北海道の人はセーターなのに沖縄の人は T シャツ。おもしろーい！」そんなことで盛り上がる生徒さん。そこにはオンライン＝冷たい、という印象はありません。

結果として、最初はなかなかオンラインレッスンを受講しなかった生徒さんたちが、みるみるオンラインにハマり始めました。

「これを教室の外にまで広げれば、教育のオンライン化は進み、感染拡大にストップがかかるんじゃない？」

と、先生のお一人。うなずく全員。

では、どうやって？

教育の世界に今までなかった

「安心ゾーン」(サードプレイス)

をつくることです。

<コロナ禍で必要になった「もう一つの場所」>

教育の分野では、まだ、オンラインに抵抗感を持っている先生・生徒さんは多い。

また、コロナ禍で塞ぎ込んだり、モチベーションが下がっている生徒さんも多い。

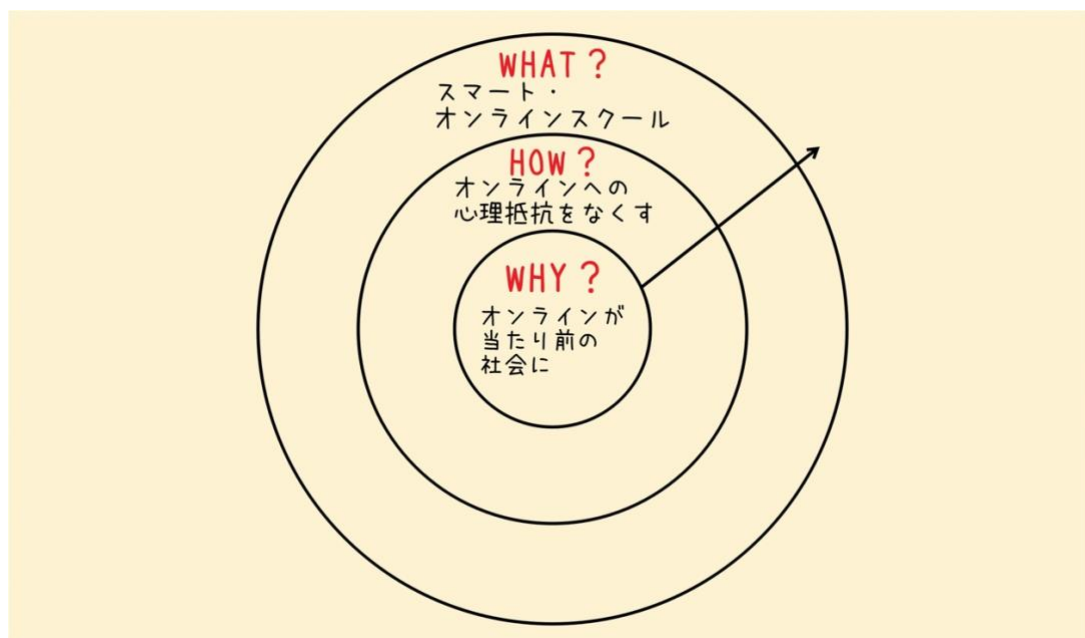
そこで・・・



「オンライン＝楽しい！」と思ってもらえ、なおかつ、心が癒され学びの意欲が回復するゾーンをつくります。すると学習効率が上がるとともに、オンラインに対するポジティブなイメージ

ジが湧き、「遅れている」と言われる教育のオンライン化が進むでしょう。

そのために学校、家庭につづく第3の場所「スマート・オンラインスクール」をつくります。



オンライン教育が当たり前になれば、時間・場所を超えて、やりたいことが学べる社会になり、みんな勉強が好きになります。もちろん、感染症予防や、移動による CO2 削減にも繋がります。

私たちは、このような「オンライン・ファースト」社会を目指し、これからも活動が続けます。

私たちがやっていること



<自己紹介>

ここで、少しだけ自己紹介させてください。

私たち「株式会社学びの庭ひまわり」は、オンライン音楽レッスンを推進する、国内外 38 教室からなる団体です。

教育方針には「自主自律」「個性尊重」「オンライン」の 3 つの柱を掲げています。

同時に、教室同士がオンラインで繋がり、ひとりの生徒さんをみんなで見守り、個々に寄り添って教える「教育の DX 化」をミッションにしています。

前身団体は、まだ「オンライン」が知られていなかった 10 年前から「スカイプ音楽レッスン」をやってきました。当時はよく回線がフリーズし、クレームの嵐でした（涙）

でも、そのおかげで「音楽も、オンラインで教えられる！」ということを知っていただけました。

当時はまだ対面レッスンが多かったのですが、「オンライン音楽教育の先駆者」として、業界内では認知されてきたと思います。

そこで、歩みを一歩進め、オンラインに特化した音楽教室へチェンジすることにしました。



<進まないオンライン化>

とはいえ、こちらの思惑とは裏腹に、オンラインへの移行はスムーズには進みませんでした。

2020 年、コロナ禍になりましたが、オンラインレッスンは思ったほど広がらない・・・

生徒さんも先生も「オンライン＝難しい」というレッテルを剥がせないのです。

そこで「オンラインって、こんなに楽しいんだよ！」とアピールするイベント、企画を次々に立っ

てました。オンラインを「仕方なくやる」→「やりたい！」に変えようという活動です。

たとえば、全教室一緒にピアノ練習してみたり、



全教室一緒にパーティーしてみたり、



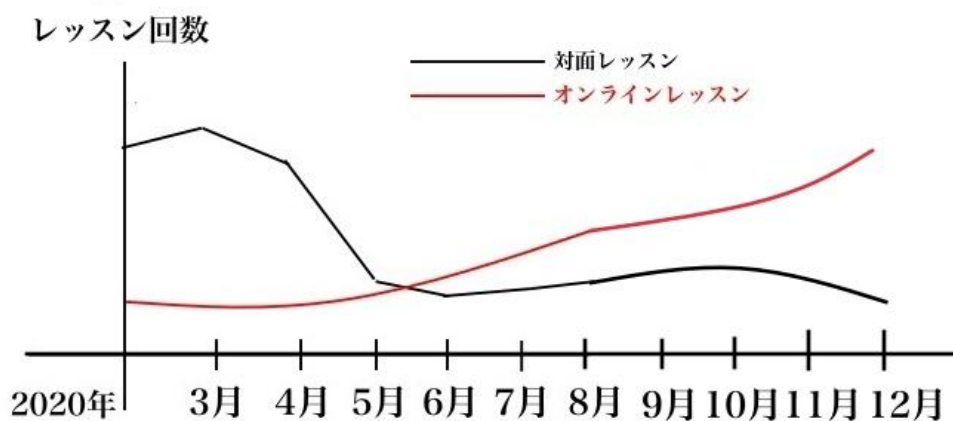
生徒さん同士のトークルームをつくってみたり、



先生方の「職員室」をつくってみたり、



そうするうち、オンラインレッスンを始める生徒さん、先生が、どんどん増えました。



それだけではありません。普段バラバラに仕事している先生同士の仲が良くなり、結束が強くなりました。

<「おへや」誕生>

そんなある日、先生たちの雑談から、アイデアが生まれました。

「オンラインのハードルを下げる”おへや”をつくったら？生徒さん同士が一緒に学べて、先生がアドバイザーになる、みたいな。そうすれば、オンラインがもっと世の中に広がりそう！」

そこで2022年2月、スマート・オンラインスクール「ひまわりのおへや」を実験的に始めました。



まるでおうちの中にいるような気さくな雰囲気の中、「おしゃべりしながら学ぼう」がコンセプト。会話の手助けを先生が行います。

普通の習い事よりハードルを下げて、楽しめる内容にしています。

まだまだ実験段階ですが、すでに好評をいただいています。





<ポイント「デビュー」「おしゃべり」「橋渡し」>

本スクールは、オンラインの「入り口」に特化しています。なので「深く学ぶ」より「楽しさ」を重視します。

これをきっかけに「あそこの塾、オンラインで受けてみようかな？」のように「オンライン・デビュー」していただくことが目的です。

そのために「会話」でオンラインの楽しさを味わっていただきます。

実は「オンラインが苦手」という理由に「会話しづらい」があります。ただ、それは慣れていないだけ。先生のサポートのもと、会話に慣れれば、学校のオンライン授業も受けやすくなるでしょう。

そして、習い事や学校のオンライン学習に進んでいただける「橋渡し」ができれば、と思います。

<先生、教室との協業、コラボ>

生徒さんと同時に「先生（参加教室）」を募集します。

先生側もオンラインに慣れていただければ、教育のオンライン化は進むでしょう。

現在、コロナで対面授業ができないため、生徒数が減っている教室さんがたくさんあります。そんな教室の先生に、空き時間を利用してやっていただきます。これをきっかけに、二の足を踏んでいたオンライン授業を始められるかもしれません。

不安のある先生には、豊富な経験を持つスタッフがサポートさせていただきます。

将来的には、先生と生徒さんが出会うプラットフォームをつくりたいと考えています。

<収益構造>

本スタート時、レッスン料は定額制にし、好きなときに好きな「おへや」に何回でも入れるようにします。

1ヶ月の体験期間を設け、その後利用料が発生します。

レッスン料収入から講師の給料を支払います。

各先生は、普段のレッスンと並行して行うのでリスクがなく、気軽にチャレンジできます。

<保育園、学校の授業の一部に>

本スクールは、従来の教育を否定するものではなく、むしろ補完するものです。

将来的に、保育園、幼稚園、学校の授業の初め 5-10 分を使って「リフレッシュタイム」を設けたいと考えます。

ただでさえ授業時数が逼迫する中、レクリエーションなどのリフレッシュタイムはなかなか取れません。かといって、リフレッシュしないと脳の機能が低下します。

その一助として、みんなで体操したり、ゲームしたり・・・オンラインでのリフレッシュタイムを行います。

体操でリフレッシュ！



このように、今まで教室内だけだった活動を、教室の外に広げ、オンラインの良さをみなさんに知っていただけたらと思います。

私たちの夢



最後に、私たちの夢について書かせていただきます。

今、教育が変わろうとしています。

一斉学習→個別学習、対面学習→オンライン学習など、です。

ただ、私たちは、従来の教育を否定しません。あくまで共存し、従来の教育ではできないことをサポートさせていただこうと思います。

子供たちにとって、何がベストなのかを、学校、保育園、塾・・・などと協力して、模索し続けたいと思います。

そんな、私たちの夢。

それはオンラインを「温（オン）ライン」「恩（オン）ライン」に変えること。

オンライン教育を通じて、人々が共感で結ばれ、学びを通じて生きる喜びを味わえる・・・

そんな社会の実現を目指しています。

そして次世代を担う子供たちに、美しい地球を残したいと考えます。

最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

株式会社学びの庭ひまわり代表取締役 鈴木 敬